等身大パネル 伝える命の大切さ

交通事故撲滅訴え展示 橿原であすから

交通事故は、愛する家族を奪う。それも、突然に。遺族は願う。同じ悲しみを繰り返さないで、と。被害者の遺品を並べ、痛ましい事故の撲滅を訴える「生命のメッセージ展」が26日、橿原市葛本町の運転免許センターで始まる。

（浅田朋範）

ベージュのサンダルは、健くんがいつも履いていた。友だちと釣りに行ったときも、大台ケ原へ旅したときも。

奈良市の児島早苗さん(71)は、長男の健仁さんのサンダルを展示する。

2000年5月のことだった。奈良高専4年の18歳。毎朝、最寄り駅まで原付きバイクで通っていた。その道路は住宅街にあり、道幅は約4メートル。左カーブにさしかかると、前から走ってきた2トントラックと正面衝突した。

仕事に出ていた児島さんに、長女から電話がかかってきた。

「警察から電話が来た。小さな事故ではないみたい」

すぐに病院に電話した。緊急手術と輸血の許可を求められた。電話を切ると、全身が震えていた。

病室のベッドの健仁さんに語りかけた。「お母さんはそばにいるよ。大丈夫やよ」。その日にあった何げない出来事も話した。

しかし、2週間後、健仁さんは息を引きとった。

児島さんは「火葬して姿が見えなくなってしまうことが怖かった」と振り返る。

事故から約1カ月後、大阪にある「TAV交通死被害者の会」を友人にすすめられ、月例会に顔を出した。交通事故の被害者家族の自助団体だ。ここで、刑事訴訟の進め方も学んだ。

「1人だと何もできなかったけど、遺族と会って話すことで、前を向くきっかけになりました」

04年、健仁さんの奈良高専の同級生や保護者ら約40人と、NPO法人「KENTO」を立ち上げた。交通事故の被害者や遺族を支援し、事故の撲滅に向けた講演会を開いている。

生命のメッセージ展も、01年に初めて開かれたときから関わってきた。交通事故で長男を亡くし、メッセージ展を始めた神奈川県座間市の鈴木共子さん(72)に声をかけてもらったことがきっかけだ。「命の大切さや家族の悲しみを知ってほしい」。そんな思いから健仁さんの写真や靴を展示してきた。

児島さんは呼びかける。

「人の命や生活は壊れたら取り返しがつかない。ルールを守って、運転することに謙虚になってほしい」

18歳のときに交通事故で亡くなった児島健仁さん＝母の早苗さん提供

展示される「メッセンジャー」を見る児島早苗さん＝奈良市登大路町

「家族失う悲しみ知って」「謙虚な心で運転を」

◇

生命のメッセージ展は全国各地で開かれ、これまでに150回以上催されてきた。今回は、飲酒運転の根絶や通学路での交通安全の意識を高めてもらおうと県警が企画した。交通事故で亡くなった約20人の等身大パネル「メッセンジャー」や、被害者が生前に履いていた靴を展示する。

メッセンジャーには被害者の写真と、遺族の思いや事故当時の状況をつづったメッセージが添えられている。「楽しくて笑ったり、いとおしくて抱きしめたり、そんなごく普通のことですらもうできません」と命の尊さを訴えている。

28日まで。開場は午前9時～午後4時半。無料。問い合わせは県警交通企画課（0742・23・0110）。

県内死者は減 高齢者率は増

県内の交通事故の死者は減っているが、高齢者が占める割合は増加傾向にある。

県警交通企画課によると、2011年の死者は47人だった。その後は横ばいが続いたが、19年は34人、昨年は25人に減った。今年に入ってからは、今月20日までに22人が亡くなった。

一方、死者数に占める65歳以上の高齢者の割合は、11年は48.9%だったが、19年は64.7%、昨年は76.0%に上った。今年は今月20日までで54.5%。

同課の中谷貴志・交通事故分析官は「ハンドルの重みは命の重み。すべてのドライバーに、自分の運転で人を傷つけることがあると認識してほしい」と呼びかけている。